

栗本薫

魔界水滸伝2



KADOKAWA NOVELS

人間界はもはや風前の灯か? 妖怪の巢に
繰りひろげられる異様な饗宴。

大好評、伝奇SF巨編の第二弾。



ガガヘルズ

昭和五十七年三月二十五日初版発行
昭和六十一年七月二十五日十四版発行

著者 栗本薫
くりもと かおる

発行者 角川春樹

まかいすいこでん
魔界水滸伝 2

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三 振替東京三十一五三〇八

〒一〇二 電話 営業〇三三三八八五三 編集〇三三三八八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-770902-6 C0293

栗本薫

魔界水滸伝2



KADOKAWA NOVELS

人間界はもはや風前の灯か? 妖怪の巢に
繰りひろげられる異様な饗宴。

大好評、伝奇SF巨編の第二弾。

NOVELS

●作者のことば

世界各国、どのような国のどのような地方にも、妖怪、魔性、魑魅魍魎の
云い伝え、伝説のないところはない。人が、本能的に夜闇を恐れ、

人知より以上の力に怯えたことの、それは証しにすぎぬのか、それとも、
そうではなく、それはそのような存在が、隠しおおせてはいるものの

現実になしかにあるのだ、ということのか、かすかな記憶なのか。

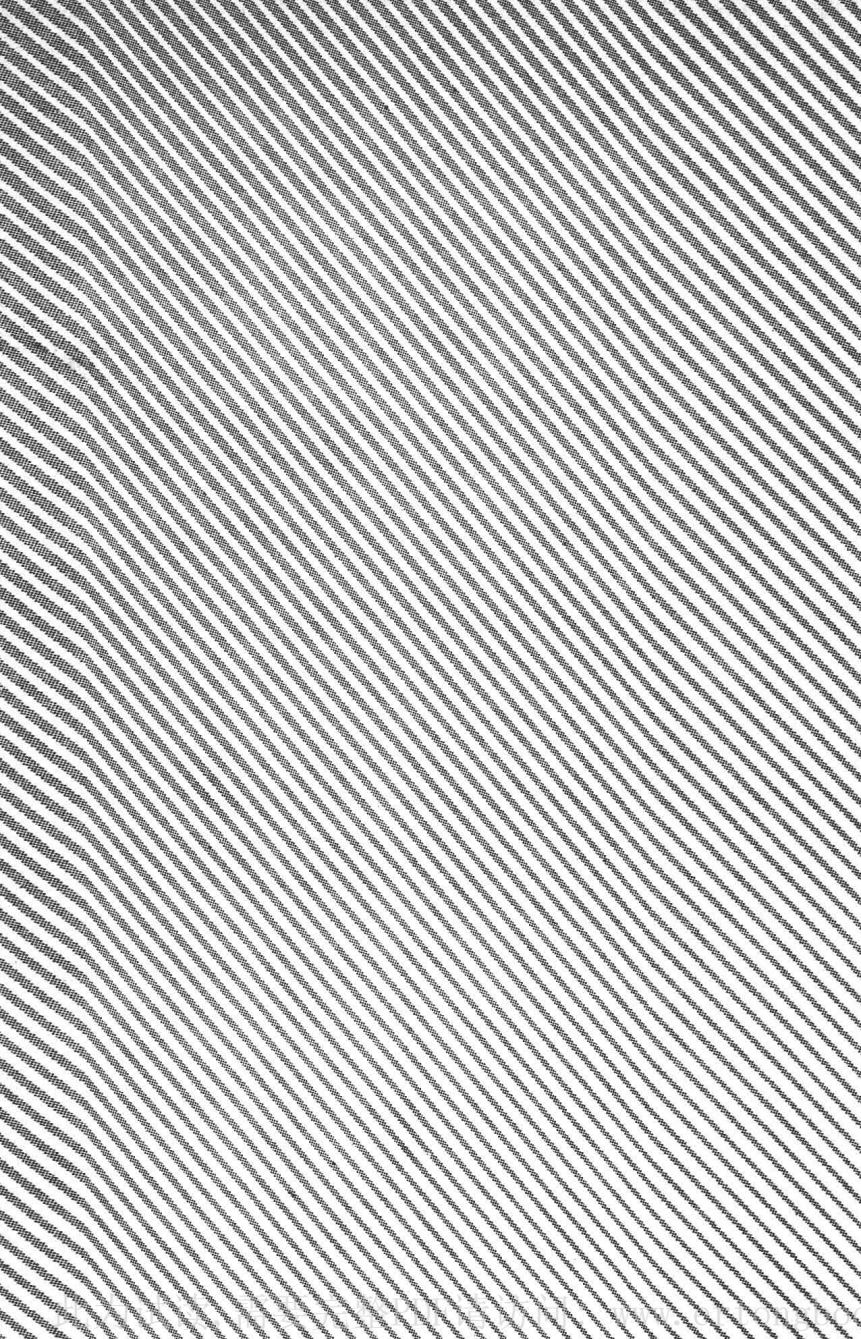
そしてもしそのような世界が現実に存在しているのだとしたら――。

略歴――一九五三年東京生。早大卒。第24回江戸川乱歩賞受賞後、推理・SF他多方面で活躍。



-770902-6 C0293 ¥640E

¥640円



KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝 2

栗本薫

カバー絵・本文イラスト／永井豪

魔界水滸伝 2 目次

承前

11

第五章 追跡

1

16

追跡

2

26

追跡

3

33

追跡

4

41

第六章 兄弟

1

55

兄弟

2

67

第八章	兄弟	3	76
傾国	4		
1			
145			
第七章	恐怖の町	1	99
恐怖の町	2		
113			
恐怖の町	3		
121			
恐怖の町	4		
134			
第八章	傾国	1	145

傾国	2	156
傾国	3	166
傾国	4	178
第九章 かれら	1	189
かれら	2	198
かれら	3	211
かれら	4	219

承前

もう、すっかり人通りはたえてしまっていた。

郊外の、新興住宅地、闇の中に、山を切り開いてたてた団地の白い影が、ぼうつとかびあがっている。

駅前には、わずかな盛り場らしいものもできてはいるが、山の上の分譲地や団地からは、バスがおわれば半端な距離だ。その上、バスは、めっぼう早く終わってしまふ。飲むものは、ターミナル駅で飲んで、タクシーをとばした方が、ずっと楽だから、あまりその盛り場でみこしをすえようという客もないのだろう。

ほんの何十分か前に、コツコツと足音をひびかせて、二人づれのバトロール警官が、まわっていったところだ。その駅前の小さな盛り場と、団地とをむすぶ、急ごしらえの道、左右はまだ林がのこっている——最近、いちばんぶっそうなのは、まさしくこういうところだ。何か月か前にも、つとめ帰りのＯＬが、まだ宵の口に、

林にひっぱりこまれ、強姦され、絞殺されて、林の奥に投げすてられた。それに、このあたりは、野犬が多い。その不運な娘も、見つかったとき、たった一晩しかたっていないかったのに、すでにひどく、犬に食いあられていたのである。

どこかで犬のなく声がきこえる。もう、秋である——しかし、今年は、ばかにいつまでも暑い。夜になれば、さすがにひえびえとしてくるが、日中は、じわりと汗がにじみ出す。

月が中天に白い。水銀灯が規則正しい影を、すぎてゆくものもない路上に投げかけている。また、犬がなく。もう、終電がつくころだ。

その——

しずまりかえった路上に——

何かが、いた。

さだかにはその姿かたちをみてとることができぬ。なかばそれは闇にとけこみ、大地に這いつくばるようになっているからだ。

しかし、それがそこにいる、ということとは、犬たちにははつきりとかぎとられるのであるらしかった。犬

の吠え声は、ひそかに伝えあつてでもいるようだった。おかしいぞ——おかしいぞ……近寄るな、このあたりへ近寄るな。何だかおかしい……

だが人間には、犬のような、すぐれた嗅覚も、第六感もない。

闇の中に、ひとときのにぎわいをふりまいて、終電がとまる。と、けっこうたくさんの、酔っぱらい、サラリーマン、女の子、ホステスたちが、ホームに吐き出される。

むろんもうバスはたえている。かれらの頼るのは、あまり多くないタクシーだけだ。そこで、目はしのきくもの、少しでも分別ののこるていどに酔っているものは、電車をおりるなり、いっせいにタクシー乗場めがけて短距離競走をはじめ。ここで、一人うしろになると、安全な家の中に帰りつき、ねどこにころがりこむのが、丸三十分はおそくなるのだ。――

《夜》の中には、いまだに、人間の中の、動物である部分を無性に刺激し、つつき、おののかせるものがあるのであるらしい。それはかつて暗闇の中から音もなぐ忍びよる大型の肉食獣に、一人、また一人、とさら

われていった、戦慄すべき記憶、種族的記憶がもたらすものなのか、それともまた、《夜》というものの、それ自体のなかに、何か人間を不安にさせるような要素がはらまれているのか。

いずれにせよ、もうすべての生物の中で、最も野性と本能を失ってしまったはずの人間たちなのに、《夜》に直面したときだけは、なぜかかつての怯えたサルにともしればかえってゆこうとするのだ。もしかして、かれらの中には、かつてのある記憶——夜に所属するもの、夜がその棲家であるものの、おぞましい、忘れがたい記憶がのこっているのかもしれない。

タクシー待ちの列を、はなれるものはいなかった。しかし、いちばんさいごに、ホームのベンチで、駅員に「終電ですよ」とつつけんどんにゆりおこされた、四十がらみのサラリーマンふうの男が、千鳥足で改札を出てきて、その列の中ほどに、よろよろと割りこもうとしたので、ちよっとしたさわぎがおこった。

「並んでるんだぞ」

「わりこまないでよ」

「うしろにつけ。うしろに」

何をと、割りこんだ男は氣色ばんだが、これがやくざなら、並んだ連中も怯えたるうが、ひどく酔っぱらっていないければむしろおとなしそうなサラリーマンとみて、ひるむどころか、列のうしろの方からさえ、非難の声があがった。

「ちゃんと並べ」

「酔っ払いめ」

「巡查を呼ぶぞ」

「何だよう」

男は酒くさい息をあたりに吐きちらかしながらもつれた舌でどなり、急にすすり泣きをしはじめた。

「何だってんだよう。——おれが何、わるいことをしたってんだよ。よってたかって何だってんだよ——ああ、わかったよ。わかったよ。誰が、そんなもの、そんなもの……」

酔っ払いに特有の氣まぐれで、たちまちそれまでのことを忘れたようにくると背をむけて、そのままよろよろと、暗い道を歩き出す。

とめるものはいなかった。現代人にはもうつきものの無関心のせいだったかもしれないし、もつとあやし

い何か——（となりのサルが食われれば、自分は食われない）といった、そんな無意識の底に沈んでいる本能のためであつたかもしれない。

今夜は、何かしら、いつになく暗く、そして妙に、世界中がきき耳をたてているようにあたりが静まりかえっているように思われた。タクシーの赤い光はしばらくとだえていた。人びとは何となく、妙にけばだつたような顔で、闇の中に消えている道に吸いこまれてゆく酔っぱらいを見送り、顔を見あわせた。

男は、ときどき大声で歌をわめきちらしたり、急に黙りこんだり、意味もないひとりごとを叫んだりしながら、のろのろと夜の中をひとり歩いていった。

犬の吠え声が、高くなったり、低くなったり、夜の潮騒しほざわのようにうちよせてくる。

「何でえ、ちきしょう」

男はぼんやりとつぶやいた。会社で、何かおもしろくないことがあつて、つい泥酔するまで飲んでしまったのだらう。ともすれば、どきりと道にころがったまま、ぐうぐうと眠りこんでしまいそうだ。

木々をすかして、ちかちかと、団地の灯らしいものがとく見えた。前にも、うしろにも、まったく人通りはない。車も通らない。これでは当分、駅のタクシー乗場に並んだ連中も、帰りを待たされなくてはならないだろう。

「くそつたれええ……課長のばかやろう——」

ヒック、と男はしゃっくりをした。

そして、足をとめ、ふしんそうにうしろをふりかえった。

「誰か、いるのか？」

ほんの少し酔いのさめたような声でたずね、闇をすかし見るようにしたが、

「ハ、ハ、ハ、犬か。ちきしょう、犬まで人をばかにしやがって……」

ハッハッハッハッ——

微かなあつい息づかいがきこえた。

フッフッフ——けだものくさい熱い呼吸が感じられるような、鼻から吐く息の音。

だが——

何かが微妙にちがっている。

何がどうちがうのか……

ふりむいた闇に、野犬の赤くもえる目も、黒くうずくまる毛皮ある獣のかげもひとつも見えぬ。

「……………」

ふいに、酔っぱらいは、酔いも、さめた、というようにすで立ちどまり、——

もういちどうしろを、しかしこんどはいやいやふりかえた。

ほんとうは、決してふりかえりたくもないのだが、しかしなぜか、ふりかえらずにいるのはもつと、いたたまれぬ恐怖をさそい出すとでもいうような、逡巡にみちたのろろとしたしぐさだった。

アドレナリンの汗の匂い。

「ウ……アア……」

男の目が大きく見ひらかれた。

眼球がとび出しそうになった。何か、おそろしいもののすがたを、闇の中にはつきりそれと見わけたためではなかった。

人間という種族の血の底にひそむ、原初の昏い戦慄すべき恐怖の追憶。

男の口が大きくひらかれ、いまにも叫び出しそうに
ゆがみ——

しかし、舌はこわばって、上あごにひからびてはり
ついてた。

男は、何ひとつ見てとることのできなかった——そ
のくせはつきりと、白日の光のもとで見てとった以上
にはつきりと、そこに何かのひそんでいることを感じ
とってしまった背後の闇から、のろのろと目をそらそ
うとした。ぎこちない、こわばったしぐさで再び歩き
出そうとする。そうしさえすればこの深い夜の呪縛が
やぶれ、何ひとつ、凶々しい悪夢など見なかったこと
になる、とでもいうかのように。

男は油の中であがいているように、両手を前につき
出し、何かにつかまろうとするようにした。

何かがゆっくりと——おそろしくゆっくりと身をお
こす気配があった。

何の音もしなかった。

ただ、微かな、おしひそめられたうめきがたった一
度、そして、ベキベキと何かもろいものをへし折って

いるような音。

フツ、フツ、フツ、フツ——とかすかな息づかい、
べちゃべちゃいう、何かをねっとりした舌が満悦しな
がらなめているかのような音、そして、——

静寂。

路上に、何か異様なものがころがっていた。

犬の悲しげなき声がひとときわたかまいったかと思
うと、ふいにびたりとやんだ。路上にころがったものは
びくびくと動いていたが、やがてゆっくりと冷えてい
った。

ブアーンとやけに耳に立つ排気音をのこしてタクシ
ーが駅へむかって走りすぎた。タクシーは、路傍にあ
るものには気がつかなかった。それはヘッドライトの
死角に入っていた。

びたりとやんでいた、犬どものほえ声が、やにわに
命令でもされたかのようにまたおこる。

その中で——

あるものが、ゆっくりと、身をおこし、あと足で立
ちあがると、妙に満足そうな、ひよつとしたら長いね
とねとした舌で舌なめずりでもしているのか、と思わ